

## 千葉県立千葉北高校

# 評価基準を教師間でだけでなく、生徒にも共有し、指導と学習の改善を図る

千葉県立千葉北高校は、「柔構造」の組織体制を基盤に、各教科・科目がシラバスを作成して観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）を実践している。実践の振り返りも学校全体で行うことで、教科を超えて指導の改善に取り組むとともに、具体的な評価基準を教師と生徒が共有することで、生徒の学習意欲が高まっている。

### 同校の新教育課程とその編成に向けた取り組み

本誌4月号・特集P.8～11をご覧ください。



### 同校の授業改善の取り組み

本誌8月号・特集P.7～12をご覧ください。「現代の国語」「生物基礎」のシラバスをダウンロードできます。



### 学習評価の全体の方針

- 学習の到達目標や年間学習計画、3観点別のルーブリックと評価方法を明記したシラバス（\*1）を、各教科で科目ごとに作成し、教師間でだけでなく、生徒にも共有。
- ルーブリックの評価尺度は、A・B・Cの3段階に設定。3観点に対応する「7つの北高力」（\*2）をひもづけ、学習の到達目標と「7つの北高力」がつながるようにする。
- 年度中も評価の方法やルーブリックを見直し、適宜改善。

### 観点別評価を評定に総括する方針

- 「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点は、1：1：1の比率とする。
- 単元ごとに3観点における達成状況をA・B・Cで評価。
- 学期末には、各単元の観点別評価の結果を観点ごとに縦に並べ、A=3、B=2、C=1として数値化した上で、それぞれ平均値を算出し、それらをその学期の観点別評価の結果とする。同様に、学年末には、各学期の観点別評価の結果を縦に並べて平均値を算出し、それらを1年間の観点別評価の結果とする。
- 評定は、学年末のA・B・Cの組み合わせによって、以下の例のように算出。  
5：AAA、4：AAB、3：ABB、AAC、BBB、ABC、BBC、2：BCC、1：CCC

### ● 指導・学習改善につなげる仕組み 観点別のルーブリックを活用し、 知識偏重の授業から脱却

千葉県立千葉北高校は、教科・科目ごとに作成したシラバスに、学習評価の方法や材料、観点別のルーブリックを明記し、それに基づいて学習評価を行っている。育成を目指す「7つの北高力」は、それぞれ3観点到ひもづけている

ため、「7つの北高力」を踏まえた授業づくりと学習評価、そして評価結果を踏まえた指導改善を実践することができている。学校改善



1学年担任、生徒会指導部  
山口雄大  
やまぐち・たけひろ  
教職歴9年。同校に赴任して1年目。国語科。



教務主任  
鈴木淳和  
すずき・としかず  
教職歴8年。同校に赴任して4年目。数学科。



2学年担任、生徒会指導部  
常盤亜紀子  
ときわ・あきこ  
教職歴22年。同校に赴任して5年目。理科（生物）。



進路指導主事、  
学校改善プロジェクトチーム  
和泉雄介  
いずみ・ゆうすけ  
教職歴14年。同校に赴任して9年目。外国語科（英語）。



1学年主任、教務部  
森谷一雅  
もりや・かずまさ  
教職歴15年。同校に赴任して10年目。理科（生物）。



校長  
勝田幸裕  
かつた・ゆきひろ  
教職歴38年。同校に赴任して2年目。

\*1 「現代の国語」「生物基礎」のシラバスは、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』（<https://view-next.benesse.jp/>）からダウンロードできます。上記2次元コードから、または「TOP→学校教育情報誌『VIEW next』→高校版バックナンバー」をご覧ください。

\*2 「徹底力」「課題発見力」「思考力」「実践力」「創造力」「協働力」「自己改善力」の7つ。

数学科

数学 I・A

観点別の出題によって、応用問題を諦めない姿勢に

1学年の数学科では、定期考査や小テストを、「知識・技能」と「思考・判断・表現」の観点別に作問し、それぞれの観点の評価材料としている。「主体的に学習に取り組む態度」については、授業中のノート、ワークシート、課題プリントの記入内容と提出率を基に評価する。

定期考査や小テストの点数を観点別に出すことで、生徒の学習の取り組み方が変化した。これまでの定期考査は、平均点 60 点を目安に、主として教科書レベルの知識・理解を評価する問題から構成され、概ね 8 割以上の点数が取れば、評定を「5」としていた。それが、観点別に問題が出されて評価がつくことで、「思考・判断・表現」の観点で評価される応用問題で点数が取れなければ、「思考・判断・表現」の評価が「B」や「C」となり、評定は「5」にはならなくなった。

「難しい問題が解けなければ高い評価は得られないと生徒は気づき、以前は最初から諦めていた問題に取り組むようになりました。その変更によって、定期考査の問題構成が大学入学共通テストに近づいたことも、生徒の意欲を高めることにつながりました」(鈴木先生)

国語科

現代の国語

2学期は評価の機会を増やし、学習意欲の向上につなげる

1学年の国語科では、教科内で1学期の学習評価の状況を振り返った際、評価材料が少なく、生徒の資質・能力を適切に評価できていないのではないかとという声が上がった。そこで2学期は、1枚のワークシートでも大問ごとに評価するなど、評価の機会を増やすことにした。そして評価の3観点を明示し、何をどう努力すればよいのか、生徒がつかみやすくなるようにした。

「記述式問題を苦手としていた生徒が、『書く力を鍛えるためにはどうしたらよいか』と相談に来ました。自分が身につけなければならない力を、自分で考えられるようになってきています」(山口先生)

その際に、短い文をつないで書く方法や、書き出した文章を組み替えながら完成させる方法など、様々な方法を指導したところ、自分に合う方法を模索し、書く力を磨こうとする生徒の姿が見られたという。

「生徒の学習意欲をさらに高めるために、単元の開始時に評価がAとなる基準を示し、そこに到達するためにはどんな取り組みが必要なのかを具体的に説明して、生徒の目標設定を支援していきます」(山口先生)

プロジェクトチームの和泉雄介先生は、こう語る。

「3観点で評価する仕組みを整えたことで、資質・能力の3つの柱を育成する意識が各教師の中心で高まっています。『知識・技能』の習得を重視しがちだったこれまでの授業を、他の資質・能力の育成も踏まえた内容・構成の授業へと見直し、今まで以上に、1年間を見通した指導計画を考えるようになりました。そのこと自体が指導改善につながっています」

観点別評価によって、生徒は努力の道筋を立てやすくなったと、国語科担当で1学年担任の山口雄大先生は語る。

「中間考査の知識・技能の点数を5点上げたい』『小テストであとどれだけ得点すれば、知識・技能はAになるのか』などと、目標を具体的に挙げて相談に来る生徒が増えています。生徒と一緒に解答用紙とルーブリックを見ながら、学習改善方法を考えています」

同校では、学習評価のあり方を年度途中でも見直し、改善する方針とした。実践するからこそ見え

科目ごとに、観点別のA・B・C、評定、ABCの組み合わせのそれぞれの割合と、評価材料及び評価方法、担当教師の振り返りコメントを一覧表にし、全科目分を全教師で共有。各教科・科目の実践と課題を、担当教科の指導改善に生かせるようにした。

図 学習評価の状況の共有表(例)

評定平均 3・4	知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度	
	A	25.7		20.1		51.3
B	73.0		78.3		48.1	
C	1.3		1.6		0.6	
評定	組み合わせ					
	5	9.7	AAA (9点)		9.7	
	4	18.7	AAB (8点)		18.7	
	3	70.1	ABB, AAC (7点)		29.9	
			BBB, ABC (6点)		38.3	
BBC, ACC (5点)			1.9			

数値は%で、編集部による仮値。 ※学校資料を改変して掲載。

る課題や改善策があるからだ。教務部が主導し、1学年の1学期の評価について、科目ごとに各観点のA・B・Cの割合とABCの組み合わせの割合、評定平均、そして評価方法を一覧表にし(図)、全教科で共有した。教務主任の鈴木淳和先生は、その意義をこう語る。

「主体的に学習に取り組む態度」のAの割合が最も高かった情報科では、提出物の評価で、シラバスに示した評価基準をさらに具

英語科

英語コミュニケーションⅠ

1学期の結果を踏まえて、2学期のテストの評価規準を変更

「英語コミュニケーションⅠ」では、1学期のパフォーマンステストの評価が想定以上に高かった。そこで、教科内で話し合い、2学期は、1学期のテストで多くの生徒が不十分だったアイコンタクトやジェスチャーの指導に重点を置くことにし、評価の規準を「Voice」から「Delivery」に変えた。

「新たな評価規準を生徒に説明したところ、プレゼンテーションの練習に意欲的に取り組み、結果、パフォーマンスの質が全体的に高まりました」（和泉先生）

単元の開始時には、生徒はその単元での自分の目標を立てて、「学びの記録」に記入する。目標は、3観点の評価基準を基にする生徒もいれば、単元の最初に教師が示す指導の重点を踏まえて決める生徒もいる。生徒が振り返りを記入したら、教師はそれを回収し、確認の印をつけて返却する。単元の中盤には、目標の到達状況を自己評価し、後半の目標を改めて立てる。

『学びの記録』の記入内容を見ると、目標を意識して学習する生徒が増えています。それが、パフォーマンステストの結果にも表れていると思います」（和泉先生）

理科

生物基礎

クラスの平均点の違いから、自身の指導を見直す

「生物基礎」では、定期考査、実験レポート、プリント、授業中の発言、自己評価・相互評価を評価材料とすることを、科目内で統一した。

『生物基礎』の担当教師3人が共通認識を持つために、指導についてよく話し合うようになりました。それ自体が、指導改善の機会になっています」（常盤先生）

定期考査は、「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点別に作問し、生徒にも評価の観点を設問ごとに示した。観点別に点数を算出し、考査全体の平均点ではなく、「知識・技能」と「思考・判断・表現」のそれぞれの平均点を見て、生徒の学習の改善点を分析できている。また、定期考査を科目内で統一したことで、各クラスの平均点を基に、よりよい指導を模索するようになった。

「平均点が高いクラスの担当教師の指導内容を聞いて、自身の指導を見直すようになりました。例えば、担当クラスの平均点が高かった常盤先生に授業の工夫を聞いたところ、免疫の仕組みの学習時に、劇仕立ての教材を活用していました。そのように、自分にはない発想やノウハウを学ぶことができています」（森谷先生）

体的に生徒に伝え、主体的に学習に取り組む態度の向上に努めていたことが分かり、他教科の参考になりました。そうした教科を超えた評価についての議論は、学校全体の指導改善につながりました」

1学期の学習評価の共有を受けて、「生物基礎」では、2学期の「主体的に学習に取り組む態度」のAの基準を下方修正した。「主体的に学習に取り組む態度」のBが多く、評定の5が最も少なかったからだ。1学年主任の森谷一雅先生は、次のように説明する。

「Bが多いのは、基準の幅が広いということ。生徒の実態を踏まえて基準を見直し、生徒が適切な目標を持てるようにしました」

「生物基礎」担当で2学年担任の常盤亜紀子先生は、「主体的に学習に取り組む態度」の育成方法を今後改善していきたいと話す。

「他教科の指導内容から、具体的な目標を事前に示せば、生徒はその目標に向けて何をすべきか考えるため、主体的に学習に取り組むようになるのだと思います。担当の『生物基礎』でも、観察で

気をつけるべき点や実験に取り組む姿勢など、目標を具体的に示そうと考えています」

●展望

生徒が学習改善に活用できる評価結果の伝え方を模索

同校は2022年度より順次、生徒1人1台端末の環境整備を進めており、指導と学習評価でICTをいかに活用するかも今後検討していく。併せて、教師から生徒への評価の結果の伝え方も見直したいと、勝田幸裕校長は語る。

「評価の結果は一人ひとり異なるものであり、数値ではなく、言葉で伝えることが大事だと、國學院大学の田村学教授がおっしゃっていました。確かにその通りで、到達したことや課題を生徒が理解し、それを踏まえて学習が改善することと初めて、学習評価は機能したと言えます。そのためには、学習の主体である生徒が、もっと評価にかかわってよいはず。生徒自身がその必要性を一層感じられる評価の実現を目指していきます」